

# 太平天国の広西北部、湖南南部における活動について

菊池 秀明

## はじめに

近年の中国史研究における変化は、新史料の発掘による歴史像の再構築という動きであろう。なかでも清朝政府の公文書であった檔案史料の公開は、従来編纂された史料集や地方志レベルでしかわからなかった歴史の具体像を我々に開示した。また中国近代史研究における新史料の発見は、それぞれの時代の政治的要請に基づく一面的な歴史認識の見直しを可能にした。かつて中国革命の先駆者として称えられ、現在はその破壊的側面が強調されることの多い太平天国運動（1850–64年）も例外ではなく、今こそ客観的な立場からこの運動の実像を解明する必要性が高まっている。

太平天国史研究において難しいのは、残された史料が少ない初期の歴史である。かつて筆者は広西東南部におけるフィールドワークの成果に基づき、移民社会のリーダーシップを握った科举エリートと非エリート間の対立が、この運動を生んだ基本原因であったことを明らかにした<sup>1)</sup>。また別著では19世紀前半における中国南部の社会変容について分析し、清朝の統治が新興勢力を活用する柔軟さや辺境経営への情熱を失って行きづまり、秘密結社への禁圧が進む中で、人々は直接的な行動に訴えることで「理想なき時代」を乗り越える処方箋を熱望していたと述べた<sup>2)</sup>。

さらに筆者は金田団営期の太平天国について、偶像破壊運動を行った上帝会が蜂起の準備を慎重に進め、挙兵後も各地の会員を糾合して清軍の包囲網を突破したことを指摘した<sup>3)</sup>。また永安州時代の太平天国が王朝体制のひな形を整え、東王楊秀清のイニシアティブを強化して古参会員に対する粛清を行ったこと、広東信宜県の凌十八はいち早く蜂起しながら、その慎重な行動ゆえに太平軍と合流できずに敗北したことを明らかにした<sup>4)</sup>。

本稿は太平軍が永安州を脱出した1852年4月から、湖南省南部の道州を占領し、ここに駐屯していた同年7月頃までの期間を取り扱う。この時期は太平天国の歴史にとって、桂林攻撃の失敗と全州袁衣渡の敗北で挫折を被りながらも、多くの参加者を得て勢力を拡大し、全国的な運動へ発展することになった転機であった。

だがその重要性にもかかわらず、この時期の太平天国に関する研究成果は簡又文氏<sup>5)</sup>、鍾文典氏<sup>6)</sup>、茅家琦氏<sup>7)</sup>らの通史的著作および崔之清氏の軍事史研究<sup>8)</sup>、イギリス所蔵の地方檔案から湖南で太平軍に参加した兵士の供述書を発見した小島晋治氏の分析<sup>9)</sup>などを除くと少なかった。その主な理由は史料の不足にあり、とくにこの時期の檔案史料（宮中檔と軍機処

檔)が多く台北の国立故宮博物院に保存されていることは、大陸の研究者にとって一つの障碍となっていた。

そこで筆者は1999年から故宮博物院を訪問し、同図書文献館所蔵の檔案史料を系統的に整理、分析した。また2008年、2009年にはイギリスのNational Archivesを訪ね、新たな史料を発見した。さらに1987年から広西桂林市に留学した当時の見聞を加えて、この時期の太平天国の歴史を出来る限り具体的に描き出してみたい。それは太平天国史を階級闘争史の枠組みから解き放ち、新たな全体史を構築するための一階梯になると思われる。

## 1. 太平天国の桂林攻撃と地域社会の反応

### (a) 太平軍の北進と桂林攻撃の開始

1852年4月に永安州を脱出した太平軍の主力は、7日に昭平県の大垌に到着した。この時彼らの進路として可能性が高かったのは東進であった。当時信宜県で凌十八蜂起の弾圧に当たっていた両広総督徐広縉は、広東巡撫葉名琛への手紙で次のように述べている。

永安の逆匪は現在大広、桂花へ逃れ、水路に近づいている。だが川の対岸には多くの兵を置いて防いでいないから、恐らくは渡河した後に賀県境に入るだろう。すると開[建]、広[寧]一帯の状況が重要になるので、先に兵を動員して□防してほしい。

続いて徐広縉は府江沿岸の船はすでに撤去され、要所に兵を配置していること、太平軍は「数日分の食糧を携帯」しているに過ぎず、追撃および迎撃の兵も多いため「永安の情形に比べれば手をつけやすい」<sup>10)</sup>という楽観的な見通しを述べていた。

その後三冲で清軍は大敗を喫したが、太平軍の進撃方向については「上って平楽を窺うのでなければ、下って梧州に向かう」「報じられた賊の逃走方向はおよそ東北一帯であり……、平楽府城は最も危急」<sup>11)</sup>とあるように、なお東進との見方が多数を占めた。その根拠は捕虜となった太平軍将兵の供述であり、洪大全も「我々は元々古東から昭平、梧州へ行き、広東へ逃げるつもりだった」<sup>12)</sup>と語っていた。さらに清朝は太平軍が西江沿岸で活動していた波山艇匪や羅鏡墟の凌十八軍と呼応することを憂慮しており、その東進は予想された行動だったと言えよう<sup>13)</sup>。

ところが太平軍は進路を北に変え、永安州三妹のヤオ族地区を経て天平坳へ向かった。李秀成の回想によると「東王は命令を伝えて昭平、平楽には行かず、小道から牛角嶺山を抜けて馬嶺へ出た」<sup>14)</sup>とあるように、その決定は東王楊秀清が下したという。この知らせを受けた欽差大臣の賽尚阿は、「省会南路の咽喉」で兵站基地だった荔浦県城が目標ではないかと考え、ここを守るべく広西提督向荣の軍を派遣した<sup>15)</sup>。だが太平軍は荔浦県には向かわず、4月14日にかつて羅大綱が根拠地としていた馬嶺墟を占領して、15日朝には陽朔県の高田墟に到達した<sup>16)</sup>。

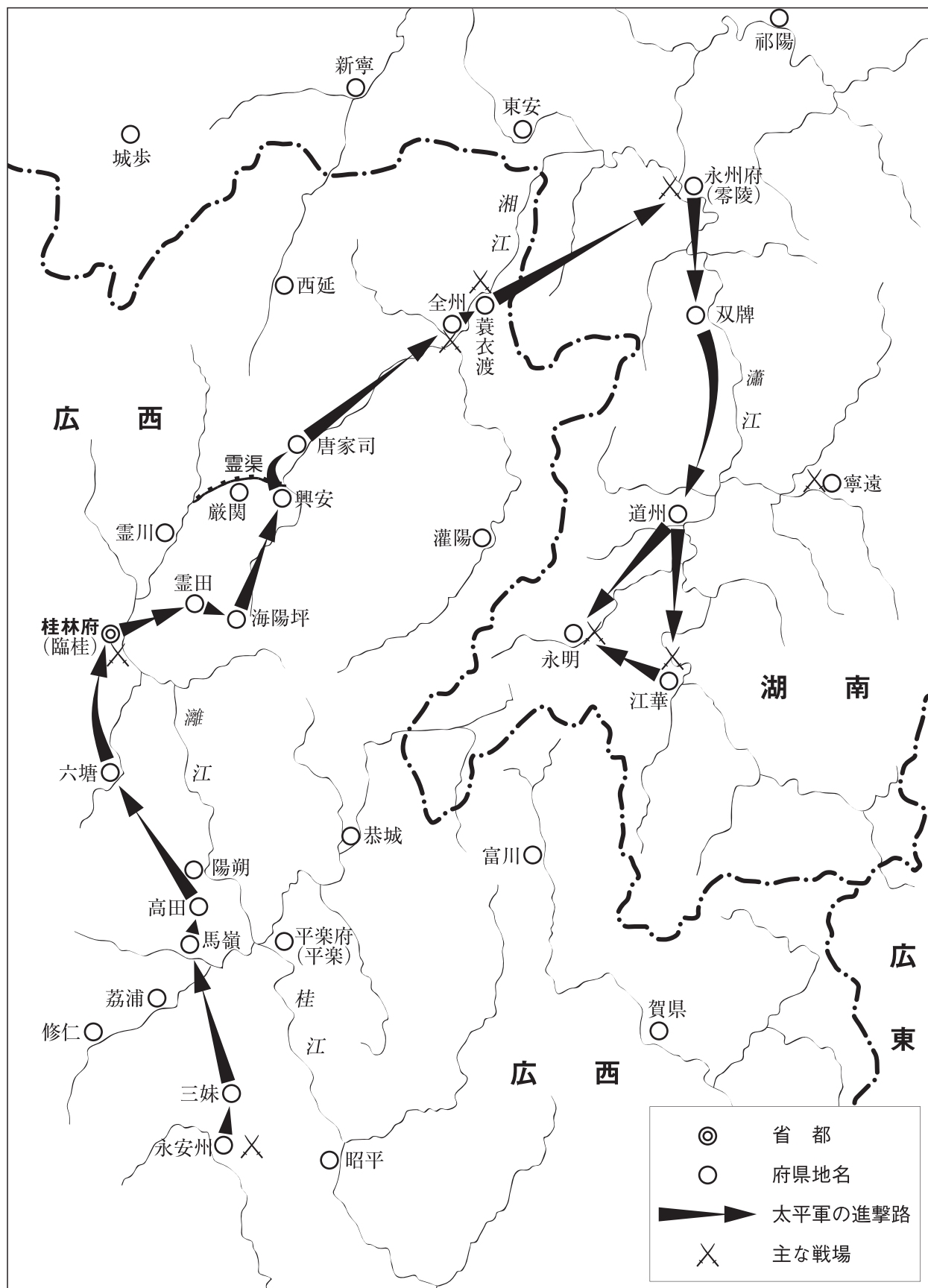


図1 広西北部・湖南南部の太平軍進撃ルート（1852年）



写真1 桂林省城の城壁（内城部分）



写真2 太平軍が砲台を設けた象鼻山

太平軍による突然の北進に対して、清朝の地方政府は「一つとして備えていなかった」<sup>17)</sup>とあるように全くの無警戒だった。4月16日に数千名の太平軍が省都桂林から30キロ余りの臨桂県六塘墟に進出すると、桂林城内は「民は紛々と避難し、人心は大いに震動した」とあるようにパニック状態に陥った。桂林の守備兵が1,000名と少ないことを知った広西巡撫鄒鳴鶴は、急ぎ「城郷の団練を集合させ、衆を率いて城を警備」させると共に、荔浦県の向榮に救援を求めた<sup>18)</sup>。向榮も川北鎮総兵劉長清、綏靖鎮総兵和春と兵1,000名を率いて桂林へ急行し、16日夕方に六塘墟付近に到達して太平軍の動静をつかんだ。すると彼は「土人の嚮導」を探して迂回ルートを取り、17日朝に一足早く桂林城に入って「大軍がすでに到着した。驚き慌てる必要はない」という告示を貼り出した。その結果「城内は初めて安堵した」<sup>19)</sup>とあるように人々は落ち着きを取り戻したという。

桂林は明代に靖江王府が置かれた広西の政治、文化的中心地であり、内外からなる城壁の高さは8-10メートル、周囲は6キロ以上に及ぶ【写真1参照】など、その規模は永安州とは全く異なっていた<sup>20)</sup>。4月17日午後に太平軍の先鋒隊数百名は永安州脱出戦で手に入れた清軍の装備を身にまとい、南門に現れて開門を求めた。しかし半日前に到着した向榮が発砲を命じたため、計略は失敗して城南の將軍橋に退いた<sup>21)</sup>。

太平軍の本格的な攻撃は18日未明から始まった。城南の文昌門などに殺到した太平軍の攻撃部隊は、攻城用具の雲梯を用いて城壁を乗り越えようとした。だが清軍に撃退され、城内に潜伏していた工作員も捕らえられて殺された。火力が不足していると見た太平軍は、4月22日に灘江沿いの象鼻山に砲台を築き、城内へ砲撃を加えた【写真2】。翌23日には大砲の支援を受けて再び文昌門、南門を攻撃したが、やはり清軍に却けられた<sup>22)</sup>。

いっぽう永安州にいた清軍の主力は、桂林を救援すべく北へ向かっていた。とくに三沖の敗戦を招いた張本人だった広州満洲副都統の烏蘭泰は、4月15日に荔浦県へ到着するなど行動が早かった。19日に彼が兵800名を率いて將軍橋に到達したところ、太平軍の待ち伏せ攻撃に遭い、重傷を負って六塘墟に退いた<sup>23)</sup>。4月23日に彼が陽朔県から咸豊帝に宛てて送った「遺摺」は、みずからの行動と敗北について次のように述べている。

わたくしは満洲の出身であり、兵卒から現在の職に取り立てられ、昨年三月初八日（1851年4月9日）に命を奉じて広西へ行き軍務を幫辦した。四月初三日（5月3日）に武宣へ至り、賊情を察訪して隊伍を整頓し、出陣にあたっては必ず自ら率いた。將兵と機宜を相談し、早く勝利を報告して、陛下のご期待に応えたいと願っていた。

逆賊は永安に逃れ、険しさに頼って立てこもった。わたくしは日夜焦ったが、ただ大砲で轟撃するしかなかった。逆匪も持ちこたえることが出来ず、雨の夜に逃げ出した。わたしは古東の山内まで追撃して、二、三千名を斬殺した。また天徳王の洪大全を捕らえ、すっかり一気に平定できると思いこんだ。

ところが龍寮山口の外まで追撃したところ、逆匪は平地を占拠した。わが兵は山の背に列を作り、進むことは出来ても退くことが出来なかった。また戦いの時に突然霧が立ちこめ、一寸先まで見えなくなったために、兵勇が驚き乱れ、あと一步のところで勝利を逃してしまった。わたくしは憤懣やるかたなく、先に頂戴を取り、陛下が重く罰して軽々しく前進して勝機を失った者の戒めとしてくださるのを待った。

その後賊匪が省城を攻めていると聞き、急いで跡を追った。三月初一日（4月19日）の昼に桂林城外に到着し、逆匪が城を攻撃中と知って、ただちに兵を率いて前進した。逆匪はなすところを知らず、わが軍は勢いに乗って襲いかかり、殺害すること無数であった。將軍橋は要所であったため、わたしは馬を進ませ、橋の上で兵たちに突撃の号令をかけようとした。

ところが逆匪は両側の廢屋からわたしに照準をさだめ、槍炮を発射した。身をかわそうとしたが間に合わず、左膝を負傷した。兵勇たちはわたしが負傷したのを見て、すぐに助け戻ったため、將軍橋も奪回されてしまった。

思うに二度の戦いは、いずれも大勝利となるべきところを敗北した。全てはわたしの用兵が悪かったために敗れたのであり、後悔してもどうして及ぼうか。ただ急ぎ治療に努め、やや回復したところで凡庸ながらも最善を尽くし、悪者どもを滅ぼそうと考えていた。しかし受けた傷は思いのほか重く、弾丸が骨の隙間に達して取り出すことが出来ず、毒がまわって全身が痛み、万が一にも生き延びられないと悟った。

わたしは身に国の恩を受け、軍営に至ってから……一年余り。九十数回の戦いを経たものの、全く功績を挙げるができず、恥ずかしさと怒りがこみ上げてくる。これまでのご恩に報いようと思いながら、果たせなかったことを思うと、はらわたが焼け焦がれるばかりだ。いまは死の床にあって、ただ宮城のある北へむかって叩頭し、再び生まれかわった時は牛馬のごとく尽くしたいと願うばかりである<sup>24)</sup>。

また賽尚阿の上奏によると、烏蘭泰は「賊匪が減びなければ国事は艱難であり、死んでも死にきれない」<sup>25)</sup>と言って涙を流したという。彼の死後、その兵勇 3,000 名は鎮遠鎮総兵秦定三によって引き継がれた。また臨元鎮総兵王錦繡らの率いる緑営兵、知府李孟羣の率いる



壮勇、署右江道張敬修の率いる東勇、候補知府陳瑞芝の率いる潮州勇など約1万人が桂林城外の西北各地に布陣した。だが烏蘭泰の死によって「人の節制に乏しく、恐らくは機敏に呼応できない」とあるように城外の清軍を統率できる前線司令官がいなくなり、危急を要する問題については城内の向榮と鄒鳴鶴が当たらざるを得なかった<sup>26)</sup>。

むしろ太平軍も多くの弱点を抱えていた。その第一は兵力の不足であり、4月末の鄒鳴鶴の上奏は「賊衆の男婦は約四、五千人で、大半が広東訛りである。川の東岸各村に集まるか、西郷の五里墟に駐屯している。また花橋の四圍樓や城の南門から五里離れた將軍橋や頭塘などにも駐屯している」<sup>27)</sup>と述べている。これはやや少ない数字に思われるが、5月に賽尚阿は桂林を撤退した太平軍について「およそ五、六千の衆」<sup>28)</sup>と報じた。また6月に徐広縉は次のように分析している。

この逆匪はさきに永安州を占領していた時に、男女合わせて一万人余りいた。古東に逃れた後、官兵が追撃して数千名を捕らえ殺した。桂林を囲み攻めた一ヶ月に殺された者も少なくないから、残っているのがおよそ五、六千人というのは、なお信頼できる数字である<sup>29)</sup>。

清朝側が太平軍の損害を過大に評価していたとはいえ、これを見る限り当時の太平軍が1万人を大きく超える兵力を持っていたとは考えにくい。事実彼らは桂林城の北側にまで兵を置いて包圍網を完成させることはできなかった。北門では兵糧の補給や文書の往復が続けられ、北東の東鎮門でも城壁づたいに外から日用品を購入できたという<sup>30)</sup>。

だが包圍が完全でなかったにせよ、清朝側が重圧を受けたことは間違いなかった。戦闘が始まると、桂林城内では兵勇5,000人と団練3,000人が守備につき、城外と合わせるとその兵力は2万人に達した<sup>31)</sup>。しかし5月に鄒鳴鶴が「逆匪は久しく兵勇と戦闘を交え、その多くが疲れ怯えていることを知っており、好き放題にしている」と述べたように、清軍の疲労と戦意の乏しさは明らかだった。このため太平軍が象鼻山から砲撃を始めると、巡撫衙門が被弾して鄒鳴鶴は移動を余儀なくされた<sup>32)</sup>。また前任湖南提督余万清の救援軍は半数が到着せず<sup>33)</sup>、南寧から送られた張国樑の壮勇はなかなか姿を見せなかった<sup>34)</sup>。さらに太平軍鎮圧の総帥である筈の賽尚阿は、兵2,000名と共に陽朔县城から離れようとしなかった<sup>35)</sup>。5月8日に鄒鳴鶴は苦悶する心情を次のように訴えている。

逆匪は省城を攻め、二十日間も猖獗している。イギリスが粵東省城を攻めたのを除けば、実に二百年来なかった奇変である。わたしは陛下の厚いご恩をうけ、この災厄にかかることすでに久しい。城を守るか、亡ぶかはただ蒼天を仰ぎ祈るしかない。災いも行きつくところまで行けば幸運に変わるであろう。

ここでは太平軍の攻撃を200年来なかった異常事態と述べるなど、桂林の陥落は避けられないと考えていた様子が窺われる。これに対する咸豊帝の硃批は「奏するところは実に哀れむべきであり、朕には最早論すべき言葉がない。朕は汝の心を知らない訳ではないが、地方長官たる者がどうして慌ててなすところを知らず、事態を悪化させることがあって良からうか。朕は今日南郊にて祈祷を行い、天のご加護を祈るばかりだ」<sup>36)</sup> というもので、鄒鳴鶴に同情と激励の言葉を送るほかはなかった。

#### (b) 科挙エリートによる団練の抵抗とイスラム教徒の反応

すでに述べたように、桂林で太平軍と戦ったのは清軍ばかりではなかった。在籍紳士の龍啓瑞と朱琦が組織した団練である。二人は「嶺西五大家」と呼ばれる清代広西を代表する桐城派の文人で、共に桂林の出身だった。朱琦は1835年に進士となり、翰林院編集や給事中、御史などを歴任したが、1846年に官を辞して桂林へ戻り、桂山書院の山長として教鞭を執った<sup>37)</sup>。また龍啓瑞は1841年の状元で、広東郷試の副考官などを務めた後に湖北学政に任ぜられたが、1850年に父親の死によって故郷に戻っていた<sup>38)</sup>。

龍啓瑞らが団練の結成に本格的に取り組んだのは、1851年5月に鄒鳴鶴が広西全省の団練結成を命じられてからだった<sup>39)</sup>。すでに彼らは前任の巡撫鄭祖琛のもとで臨桂県の団練を組織していたが、新たに桂林城内に団練総局を設け、紳士たちを省内各地に派遣して「勸諭」させた。また地方での団練結成が進むと、その章程の優れたものを選んで戦死した壮丁の伝記などと共に一冊の本にまとめ、『粵西団練輯略』と名づけた。その序文で龍啓瑞は道光末年の広西における動乱発生を次のように分析している。

道光二十一年(1841)以後、夷務が粵東で起きた……。事が平らげられた後に壮丁は失業し、悪賢い連中が集まって盗賊となり、アヘン商人や私塩業者がこれに従った。また外地では山や荒れ地が多く、さきに粵東の客民を招いて小作させていたが、数世代たつと人口が増えた。客主の強弱が入れ替わり、その悪質な者は西洋の天主教を唱えて愚かな民を惑わした。彼らがその仲間を用いて事件を起こすと、地方官は取り締まろうと思ったが、事態を悪化させるのを恐れた。また上官に報告しようにも処罰を恐れてタイミングを逃し、大患を醸成してついに收拾がつかなくなった<sup>40)</sup>。

ここでは動乱の原因をアヘン戦争後の治安の悪化だけでなく、広東からの移民が勢力を伸ばして土着民との関係が変化したこと、上帝会が成長して偶像破壊運動などの「事件」を起こしたにもかかわらず、事態の悪化や処罰を恐れた地方官が真剣に取り締まらなかったことに求めた点が特徴的である。

彼らが団練の結成に当たって参考としたのは、臨桂県大岡埠団練公局の例だった。大岡埠は桂林の南にあり、そのリーダーである唐岳（別名唐啓華）は1840年の解元だった。彼は

「郷里に公局を設け、人々を定期的に集めた。そして什伍の法を置き、長幼の序を作ったところ、人々は師の取り決めに従い、村では喧譁がなくなった」とあるように、従来の行政機構を補完する組織として公局を設け、そこに人々を結束させることで社会秩序を再編した。また唐岳はみずから団練の指揮を取り、自分の家の子弟を入隊させたところ、「盗賊はますます稀」<sup>41)</sup>と言われたように治安の回復に成果をあげたという。

龍啓瑞の団練結成は、これら地域社会における秩序構築の経験を普遍化しようとするものだった。彼は「通省団練を勸諭する文」の中で「およそ人は郷里を愛さなくとも、その身家を愛さない者はいない。ただ人々が自分の家や家族を守りたいと願えば、士気は約さずともおのずから奮う。ゆえに一郷に保甲団練があれば、その地の賊は身の置き場がなくなり、それを推し広めて一省に保甲団練を作れば、一省の賊も居場所がなくなるのだ」<sup>42)</sup>とあるように、家族から地域、社会全体を同心円状に位置づけ、一家の安寧を願う人々の感情を拡大することで団練の結成に結びつけようとした。また興味深いのは治安を改善するための方法として「小民衣食の源」を広げることがを主張し、開墾事業や商品作物の栽培に取り組むように訴えた点であった。彼は次のように述べている。

ある者は「わが郷は土地がやせており、開墾しても少し掘っただけで岩にぶつかってしまう」というが、本当にそうだろうか。広東、湖南、江西、福建の客民で開墾に来ている者の中には、あちこちで利益をあげて帰る者が少なくない。客民は勤勉で土民は怠惰だということのか……。

わが故郷の特産はとても少ないが、本当に土地が耕作に適さないのだろうか。それとも指導が足りないのだろうか。今日貴州では遵義の絹が有名だが、その始まりは実に乾隆年間に遵義府知府の劉公が……、養蚕師を探して広く教えさせ、年月をかけて成功させたものだ……。わが郷は気候が温暖で、養蚕や植樹には最も適しているのだから、これに倣ってやってみれば良いのである……。

また茶の栽培は利益が最も大きい。広西の茶は多くが広東に運ばれて売られ、ヨーロッパ商人も好んで買う。茶は山肌や石の多い場所に適しているから、山の多い広西ではどこでも植えることができる。岑溪県の四郷には皆茶の精製場があり、城外の樟木墟に運んで売る茶葉は、毎年大きな利益をあげている。茶摘みや茶葉を炒る時には数え切れないほどの人を養うことができるのだから、皆がこれに倣えば衣食の問題はどうして解決しない筈があろうか。

ここで龍啓瑞は入植した移民が利益をあげていると指摘したうえで、開墾や商品作物栽培に取り組んで社会を豊かにし、貧民に生計の道を与えて治安を改善せよと述べている。そのために重要なのが地方政府の指導であり、「機械や指導者を探して村民の子弟に学ばせるには、必ず官が局を設けねばならず、あるいは団練局で養蚕を学びたいと思う者がいれば、官



に赴いて申請すれば経費を得られる」<sup>43)</sup>とあるように、地方官の設置した公局とくに団練局が政府と村人たちの橋渡しとなることを期待していた。

すでに筆者は太平天国前夜の広西で、新たに成長した地域リーダーが公所を設立し、硬直した清朝の地方統治を補完しようと試みた事実を指摘した<sup>44)</sup>。龍啓瑞のめざした団練は単なる治安維持のため武力ではなく、団練局という当局の公認を受けた結束軸を手がかりに、地域の振興と安定をめざす社会再編の試みだったのである。

1851年11月に鄒鳴鶴は臨桂県良豊墟、永福県羅錦墟を視察し、大岡墟を初めとする16郷の団練1万6,000名を視察した。それらは「多いものは二千余名、少ないものでも二、三百名から六、七百名」という規模で、「官兵のように全隊が整っているわけではないが、その体つきはみな強壯で、刀矛や火器も大変立派」と言われた。鄒鳴鶴が「大義」を説いて褒美を与えると、団練の壮丁たちは「感激して奮闘を思わぬ者はいない」と士気があがり、これを見た鄒鳴鶴は「禦侮に資するに堪える」と期待を寄せたという<sup>45)</sup>。

だがこうした龍啓瑞らの試みは、太平軍の桂林攻撃によってあっけなく挫折した。永安州を出た太平軍が北上すると、陽朔県九塘、臨桂県六塘に配置された団練は敗北し、大岡墟団練の首領だった唐岳も太平軍に家を焼き払われた<sup>46)</sup>。この報告を受けた咸豊帝は「実効」あった筈の団練がなぜ役に立たなかったのかと鄒鳴鶴に問いただした。これに対して鄒鳴鶴は次のように語っている。

陽朔県所轄の九塘と臨桂県六塘の要隘については、兵力が足りないため、専ら総辦団練の在籍御史である朱琦に諸紳士を率いて六塘、九塘一帯に赴かせ、各保の練丁を集めて急ぎ防衛させた。ところが賊衆は山間の小道を越え、陽朔県城を経由せずに馬嶺、高田に向かい、突然九塘、六塘から桂林城下に向かった。二十六日（4月15日）に省城が知らせを受け取ってから、わずか二日で彼らは到達したのであり、事態が慌ただしかただけでなく、その勢いも倍増して激しかった。

これより先、大軍が永安州に雲集していた時も、逆匪は兇鋒を逞しくして囲みを破って逃走した。いわんや団練はつまるところ郷民であり、土匪や游匪が村々を騒がせるのを防ぐことは出来ても、会匪の大集団を防ぐことはできない。昨年横州や貴県、博白などで練丁が劉八、麦二、邱二嫂、梁亜蚧、何名科らの股匪を滅ぼすのを助けてしばしば実効をあげたのは、みなこれらの地がしばしば賊警に遭ったために、勇敢に善戦したからに外ならない。

桂林一帯の練丁については人数こそ多く、龍啓瑞と朱琦が親しく督辦したものであるが、地方は安静でいまだ従軍したことがなかった。戦った経験のない郷民がとつぜん会匪の大部隊による突撃を受けたのである。かの紳士たちは事態をわが事のように受けとめ、力をつくして抵抗したが、如何せん力不足に苦しんだ。時間もなく慌ただしい中で敵の攻撃を防ぐことは難しかった。これは当時の実際の情形である。

ここでは太平軍の進撃が速く準備が整わなかったことに加え、戦闘経験を持たない団練では強力な反乱軍に対抗できないという認識が示されている。これに対して咸豊帝は「これらの言葉をなぜ昨年うちに早く言わなかったのか。この時期になって力を出せず、なお欺こうとするとは、良心は何処にあるのか。よくもそんなことが言えたものだ」<sup>47)</sup>とあるように、厳しい叱責の珠批を加えた。

だが緒戦の敗北にもかかわらず、桂林の団練は1ヶ月余りの攻防戦においてそれなりの役割を果たした。後に鄒鳴鶴が提出した「随同守城最為出力団練紳士」のリストによれば、彼らの任務は城内の巡回やスパイの摘発、食糧の運搬、城門の守備、破壊された城壁の修理など多岐にわたった。また中には太平軍が攻撃した文昌門などの守備に当たり、「城をつたって賊巢を破壊」<sup>48)</sup>した者もいた。

また都市である桂林において難しかったのは客民に対する管理と対応だった。当局が「内奸を捕らえた者には銀百両を与える」という布告を出すと、続けざまに数十人が捕らえられたが、その中には冤罪に巻き込まれた者も多かった<sup>49)</sup>。太平軍の撤退後にその反省を踏まえて作られた「広西省城選丁清查保甲章程」は、外省出身者の集まる会館に「公正殷実」な客民を選ばせて団練客長に任命し、「商民」たちの管理を行わせている<sup>50)</sup>。

また桂林攻防戦に駆り出された「民勇」の給与は1日当たり銭300文だったが、董事たちが半分を横領した<sup>51)</sup>。そこで1853年に作成された「桂林府属廂郷団練府兵上番之法」では、交代で省城の警備に当たる団丁1,200名の給与は1日銭100文としたが、団丁50名を率いる隊長には別に「辛勞銭」を与え、中間搾取を禁じた<sup>52)</sup>。さらに団練の兵士にも住民の財産を奪って「公然と市場を開き売買」する者がいた。だが彼らの略奪行為は「潮勇は洗うがごとし」<sup>53)</sup>と言われた潮州勇の激しさには及ばなかったという。

さて太平軍の桂林攻撃に対する地域社会の反応として、もう一つ挙げるべきはイスラム教徒（回民）の動きであった。桂林のイスラム教徒は多くが明代に省城および臨桂県、靈川県などに入植した。彼らは元々官吏や軍人、商人の出身であったが、19世紀には没落して木工業などの手工業者や季節労働者となった者が多かった。太平軍が桂林に向かうと、陽朔県の白沙墟、臨桂県の六塘、会仙墟などでムスリムが参加した<sup>54)</sup>。

5月16日夜に南門と文昌門を攻めた太平軍は呂公車と呼ばれる新兵器を投入した。これは「一、二十人を収容出来、中に火薬罐、噴筒、刀鎗、藤牌を入れてある。広さは一丈余りで、上に木の梯子を並べてあり、高さは城と合わせてある。下は四つの車輪がついている」という木製の攻城用具であった。太平軍は呂公車の周りに護衛の兵数十名をつけて城下に迫ったが、城上の清兵によって「擋車は焼かれ、車内の賊匪は全て焼き殺された」<sup>55)</sup>とあるように攻撃は失敗した。鍾文典氏によれば、この呂公車を作ったのが西門外の清真寺（モスク）、五里墟などに住むムスリムであったという<sup>56)</sup>。

それでは何故イスラム教徒たちは太平軍に参加あるいは協力したのだろうか。初期の太平天国が客家を中心としていたことはよく知られているが、桂林一帯のムスリムと客家移民が

密接な関係にあったことを示す史料は見あたらない。また太平軍が永安州脱出後に三妹のヤオ族地区を経過すると、一部のヤオ族が太平軍に参加したと言われる<sup>57)</sup>。だがいっぽうで太平天国は強烈な客家ナショナリズムを帯びており、現在は少数民族が大挙して太平軍に参加したという議論は成り立ちにくくなっている<sup>58)</sup>。

むしろムスリムと太平軍を結びつけたのは、太平天国の宗教性とくに偶像崇拝を禁止する一神教であった。元々イスラム教は同じ啓典を元に成立しているキリスト教徒などを「啓典の民」と呼び、他の異教徒に比べて寛容な態度をとった。同じ傾向は中国のムスリムについてもある程度当てはまり、1856年に雲南で蜂起した杜文秀らはキリスト教国家であるイギリスに対して連携を模索した<sup>59)</sup>。太平天国が桂林に進撃すると「遍く廟宇を焼き、大いに偽示を張り、人心を得ようと図った」「諸祠廟の神像の首は、ことごとく賊によって斬り落とされた」<sup>60)</sup>とあるように激しい偶像破壊を行った。桂林のムスリムたちが太平天国におけるキリスト教の影響をどの程度認識していたかは不明である。だが外来の一神教を崇拝する信者として、中国既存の諸宗教を排斥した行動に共感を寄せたとしても不思議はない。つまり桂林におけるムスリムの太平軍への参加と協力は、太平天国がもつ宗教性の強さが生み出した現象だったのである。

## 2. 全州城、蓑衣渡の戦いと太平軍の道州進出

### (a) 太平軍の北上と全州「屠城」事件の真実

桂林の攻略が難しいと見た太平軍は、5月19日に城の包囲を解いて東に向かった。16日に太平軍は灘江東岸に新たに作られた鎮遠鎮総兵秦定三、侍衛開隆阿の陣地を攻めて牽制し、18日には終日桂林城内を砲撃した。19日夜に城西の五里墟で火の手が上がり、城内の清軍が気を取られている隙に、主力は灘江を渡って靈川県の靈田墟に進出した<sup>61)</sup>。

また興安県の海陽坪で北ヘルートを変えた太平軍は、22日に興安県城を占領した。知県の商昌は広西から湖南への要道である靈渠沿いの厳関で守りを固めていたが、太平軍の県城接近を知って逃亡した。23日に太平軍の後衛部隊は興安県と全州の境界にある唐家司付近で清軍と交戦し、翌24日には水陸両軍が全州城に近づいて攻撃を始めた<sup>62)</sup>。

このころ太平軍が去って危機を脱した桂林城内では、またも清朝官僚間の内紛が発生した。5月26日に桂林に到着した賽尚阿は、城内がなお厳戒態勢だったために城門が開かなかったことに怒り、鄒鳴鶴と向榮が太平軍の追撃を怠っていると弾劾した。とくに鄒鳴鶴が桂林の防備を固めず、パニックが広がったために、危うく太平軍の省城占領を許すところだったこと、彼が太平軍の退出後も桂林の安全確保にとらわれ、興安県や全州の救援に多くの兵を送ろうとしないと告発した。また向榮についても一度敗北すると高齢と病気を理由に引退を申し出ること、城内の紳士が彼に桂林に留まるように要請したのを口実に、太平軍追撃の危険を避けようとしているなどと糾弾した<sup>63)</sup>。

すでに清朝は5月24日の上諭で、鄒鳴鶴の報じた「省城団練五万人」が実態を伴わず、

経費の支出や城の防衛で手柄を立てた文武官員について誇大な報告をしたかどうかを調査させていた<sup>64)</sup>。また太平軍の永安州脱出を許した罪でみずから処罰を求めた賽尚阿についても「罪を戴いて功を図れ」「いたずらに虚文で自分を弾劾してはならぬ」と命じ、新たに両広総督徐広縉に広西へ赴き、賽尚阿と共同で「軍務を辦理」<sup>65)</sup>するように指示した。これらの情報から見て、賽尚阿の二人に対する非難が桂林攻防戦で何ら貢献しなかった彼の保身や嫉妬に発していたことは間違いない。

実際のところ、初めのうち清軍は桂林を退出した太平軍の進撃方向をつかめなかった。20日に秦定三が追撃に取りかかると、21日には署広西提督劉長清、湖南提督余万清も兵7,000名を率いて興安県へ向かった<sup>66)</sup>。むろん鄒鳴鶴が太平軍の流した「楚匪を勾結して再び攻めに来る」というデマに惑わされ、警戒を続けたのは事実だった。だが24日には出発の遅れていた臨元鎮総兵李能臣の軍も全州へ向かい、最終的に救援軍は1万7,000人となった。少なくとも鄒鳴鶴は「賽尚阿とくり返し相談」<sup>67)</sup>してこれらの措置を決めたと述べており、彼の「掣肘」を受けたとする賽尚阿の批判は必ずしも当たらない。

しかしその後も賽尚阿は、彼が全州救援の司令官として推薦した総兵和春の要請を受け、桂林に残る湖南兵900名をすぐに出発させるように求めたが、鄒鳴鶴がこれを拒否したなどという告発を続けた<sup>68)</sup>。そして6月13日に清朝は鄒鳴鶴が太平軍の桂林進攻に備えず、その団練も役に立たなかったこと、精鋭部隊を自衛のために用いたのは「実に怯懦無能」であるとして彼を解任した<sup>69)</sup>。

ここで賽尚阿、和春および戦死後に手厚く葬られた烏蘭泰がいずれも満洲人であり、鄒鳴鶴、向榮そして全州と湖南南部の各県が陥落した責任を追及される劉長清、余万清が漢人であったことは興味深い。咸豊帝にとってみれば、これらの決定は賽尚阿を欽差大臣に任命した自分の面子を守ろうとしたに過ぎなかった。だがそれは太平天国が湖南への進撃過程で刊行した「天下は中国の天下であり、胡虜の天下ではない」<sup>70)</sup>という排満ナショナリズムの檄文に真実味を持たせたのである。

ところで太平軍の全州攻撃は一つのフィクションを生んだ。それは太平軍に全州を攻撃する意図はなかったが、城内からの砲撃で南王馮雲山が瀕死の重傷を負い、報復に燃えた太平軍が城内の住民を虐殺したという伝説である。この全州「屠城」説は太平天国当時から存在したが、簡又文氏の著作などによって紹介され現在も通説となっている<sup>71)</sup>。

近年崔之清氏がこの説に異論を唱えた。氏の論点は三つあり、①太平軍は初めから全州城を占領するつもりだった、②馮雲山は全州城の陥落後、蓑衣渡の戦いで負傷および戦死した、③従って太平軍が報復のために全州城内で虐殺を行った筈はなく、いわゆる「屠城」説は太平天国を敵視した文人たちが作り出した虚構であると主張している<sup>72)</sup>。

それでは実態はどうだろうか。ここで我々はまず故宮博物院に残された太平軍兵士である周永興の供述書を見ることにしよう。彼は次のように述べている。

周永興の供述によれば、年は四十三歳、湖南安化県人である。父は周国勝、母は劉氏で、兄弟は三人。私は長男で、妻は譚氏という。私は道光十三年(1833)に広西臨桂県地方にやってきて、人に雇われて暮らしていたが、匪賊になったことはなかった。

咸豊二年(1852)二月末に会匪(太平軍をさす)がやってくると、私は山の洞窟に隠れた。三月十二日(4月30日)に六塘の山中で柴を刈っていたところ、賊に連れ去られた。私は脅されて將軍橋で入会し、経を唱えた。先鋒館の後一軍で飯を炊き、十六人に食べさせた。三月の日付までは覚えていないが、賊匪の頭目である西王(蕭朝貴)が劉星巖地方で講礼を一度行った。私は人々に従って聞きに行き、西王の顔を見た。彼は年が三、四十歳で、顔にはうすいヒゲが生えていた。

その後私は賊に従って全州に行き、宝塔の後ろで小道を守った。全州城を破った後、賊匪は私を派遣して船の上で見張らせた。官兵は続けて攻撃をかけ、初めは勝負がつかなかった。だが十八、十九両日(6月5日、6日)に全州城外五、六里の場所で戦ったところ、賊匪は負傷者が五、六百人、死者も二、三百人出た。この二日の戦いでは、賊匪は形勢が良くないと見て、頭目の西王、南王(馮雲山)、北王(韋昌輝)、羅大人(羅大綱)が共に船から岸に登り、戦闘を指揮した。西王、南王、北王が何という姓名で、羅大人が何という名前なのか、私にはわからない。というのも賊の人間はみな「某王」とか「某大人」と言うだけで、その名前を口にしないからである。

十九日(6月6日)の夕暮れ、頭目の梁四が「西王が大砲の弾にやられ、傷はとても重い」と言った。二時間ほど後、今度は「西王はすでに死に、川辺に紅の綾絹で包んで埋葬した。その他の死んだ賊匪は、みな山上に埋めた」と聞いた。さらに聞くところでは、南王も大砲で腹をやられ、弾を取り出すことが出来ないでいる。羅大人も左の胸に弾を受けたが、すでに刀で取り出した。だが二人とも恐らく生き延びられないだろう。賊営内の人間はみんなそう言っていた。

賊匪は男女合わせて約一万人おり、うち戦うことができる者は数千人である<sup>73)</sup>。

この供述書は元々賽尚阿の上奏(咸豊二年五月初四日)に添えられていたもので、広西北部を進撃していた太平軍を知るうえで貴重な新史料である。周永興は湖南安化県人で、1834年に桂林へ移住し、1852年4月に臨桂県六塘で太平軍に加わった。また6月に湖北漢陽で捕らえられた太平軍の密偵である許雄(湖北江夏県人)も1852年初めに桂林へ至り、荷物を担いで広東へ向かう途中に六塘で太平軍の兵士と会い、「戦って功績をあげれば官職を与えられる<sup>74)</sup>と誘われて従軍したと述べている。彼らは龍啓瑞らがその管理に頭を悩ませていた「客民」であったが、実際に桂林一帯でどの程度の人数が太平軍に加わったのかはわからない。ただし周永興は全州攻撃前後の兵力について総勢1万人、戦闘可能な者が数千人と供述している。これは永安州脱出時の人数を元にした徐広縉の推定とほぼ一致しており、言いかえると彼らのように個別の参加はあったものの、人々が大挙して軍に加わった訳



ではないことを示している。

太平軍に加わった周永興は將軍橋にいた「先鋒館」に配属され、16人の將兵のために食事を作った。部隊内では「経を唱」える上帝会の宗教活動が行われ、5月初めには会衆を劉星巖に集めて西王蕭朝貴による「講札」が行われた。これは講道理と呼ばれた太平天国の布教、宣伝集会をさすと思われるが、『天兄聖旨』によると蕭朝貴は5月3日に桂林で天兄下凡を行った。このとき天兄は「妖が悪事をなし」「人々が萎縮するのを恐」れて、「おのおの安心せよ」<sup>75)</sup>との詔を降したという。周永興が聞いたのも戦況が膠着する中で、士気を鼓舞するために行われたシャーマンのお告げだったのかも知れない。

周永興は馮雲山の負傷と死が太平軍の全州占領後、6月5日から翌日にかけての全州蓑衣渡の戦いであると明確に指摘している。これは李秀成の「全州を破った後に、南王は全州において陣亡した」<sup>76)</sup>という供述と一致する。むろん周永興は死んだのが西王蕭朝貴であったと思ひこみ、それは賽尚阿の「蕭朝貴は実にすでに殲せられた」<sup>77)</sup>という誤報を生んだ。だがそれは周永興が参加間もない新兵であり、当時の太平軍内でも馮雲山、羅大綱の負傷が噂されるなど情報が錯綜していたこと、清軍が遺体の確認作業を行った時に腐爛が激しく、「実に正しく識別出来なかった」<sup>78)</sup>ことを考えればやむを得ないことだった。むしろ彼の供述は戦況が不利だったために、蕭朝貴、羅大綱の二人に加えて馮雲山と韋昌輝がみずから指揮をとったと述べている。それは後軍主将であった筈の馮雲山がなぜ前線で負傷したのかという疑問を解決してくれている。

それでは馮雲山が全州城攻撃時に負傷し、太平軍が報復のために「城を屠った」とする伝説はどうして生まれたのだろうか？ 太平軍の全州攻撃は5月24日に始まり、6月3日に坑道を掘って地雷で西門を爆破し、城内に突入して占領するまで11日間にわたって続いた。全州知州の曹燮培は城の防備を固め、団練の壮丁や桂林救援に向かう途中だった湖南兵400名を含む約1,000名の兵で太平軍を迎え撃った。25日の戦闘で守備軍は太平軍兵士100余名を殺し、桂林からの援軍が接近中との知らせに士気は上がった<sup>79)</sup>。

ところが26日に州城西の魯班橋に到着した劉長清は、飛鸞橋が太平軍に破壊され、要所である盤石脚も占拠されたために、この2カ所の奪回が先決として軍を進めようとしなかった<sup>80)</sup>。全州城外では太平軍が「攻めること益々急となり、守ることもいよいよ厳」とあるように激戦となり、曹燮培は血書をしたためて城の北側の包囲を内外から破るように申し入れた<sup>81)</sup>。しかし救援軍は時に州城への接近を試みたものの、悪天候や「賊匪が柵内で堅守して出てこない」<sup>82)</sup>ことを理由に攻撃は進展しなかった。

焦った曹燮培は城内の「困憊の様子は言うに堪えない」と述べたうえで、「各大人は万余の軍がありながら、賊人の心を寒からしめることが出来ない。いわんや城中に残っているのは千余人で、衆寡敵さずである」「もしなお観望して進まず、賊を撃退する計略が一つもないのであれば、早晚必ずや不測の事態が発生するだろう」<sup>83)</sup>とあるように救援軍の弱腰を非難した。だが6月1日に和春が劉長清の陣地に到着すると、「南北兵勇の陣地は共に州城か

ら十余里も離れており、これでは応援といってもどうして力を出せようか」と嘆いたほどだった。和春は急ぎ太平鋪にいた楚勇の首領江忠源と連絡を取り、城の北側を攻める準備を進めたが、間に合わずに城が陥落してしまったという<sup>84)</sup>。

結局のところ全州の守備隊は見殺しになった。その死者について『草茅一得』は6,400人という数を挙げているが<sup>85)</sup>、明らかに誇大であり、賽尚阿の調査によれば確認された遺体は1,300名であった。また「城中の百姓は曹燮培が城の包囲が厳しくなる前に外に逃がしたため、逃げ延びた者が多い」<sup>86)</sup>とあるように民間人の死者は少なく、その殆どが清朝官員とその家族、清軍將兵および動員された団練兵士であったと考えられる。

上帝教の教義において清朝の官員や將兵は「妖」であり、偶像崇拜によって皇上帝の教えに背いた「仇敵」と見なされた。また団練も「蛇魔に惑わされ、顔を背けて仇敵に仕えている」<sup>87)</sup>人々とされ、降伏しない限り攻撃の対象であった。さらに鄒鳴鶴は「賊は久しく攻撃しても陥落しないのを深く恨み、また入城後に官民が力を奮って市街戦を演じたため、おおいに荼毒をほしいまにすするに至った」<sup>88)</sup>と述べている。全州の守備兵は太平軍の「不寛容」な宗教的情熱に支えられた敵意に直面し、逃げ場を失って必死に抵抗した結果、徹底的な殺戮にさらされたのである。

しかしこうした真剣な戦いぶりは、劉長清の例を挙げるまでもなく当時の清軍においては例外であった。むしろ官界を覆っていた虚偽と保身——その一端は賽尚阿と鄒鳴鶴、向榮の争いを通じて本稿でも検討した——の方が中国社会の中では「正常」と見なされ、一切の妥協を受けつけなかった太平軍と守備隊の態度は理解を絶するものと受けとめられた。そしてこうした「異常」な現実に人々が与えた解釈こそは、「王の突然の死に怒り、報復のために虐殺した」という物語であった。ここで殺されたのが住民に変わったのは、曹燮培の血書に「哀れむべきは満城の生霊であり、この大難に遭う」<sup>89)</sup>と記されていたためだが、それだけ清軍將兵に対する社会の不信感が強かった結果とも言えるだろう。

## (b) 蓑衣渡の戦いと太平軍の道州進出

さて全州城の戦いは太平軍の勝利に終わったが、この戦闘に日数を費やしたことは大きな挫折をもたらすことになった。広西、湖南の省境に近い全州蓑衣渡（水塘湾）の戦いである。6月5日に始まったこの戦いで、太平軍が「負傷者が五、六百人、死者も二、三百人」という損害を受け、南王馮雲山が戦死した事実はすでに指摘した。ここでは主役となった江忠源の行動を中心に検討を進めることにしたい。

江忠源は湖南新寧県人で、1837年の挙人であった。彼が台頭したきっかけは1847年に新寧県で発生した雷再浩の青蓮教反乱で、彼は団練を率いてこれを鎮圧し、浙江秀水県知県に任ぜられた。その後父の死によって故郷に戻った江忠源は、1851年に左宗棠の兄である左宗植の紹介によって賽尚阿に登用され、500名の楚勇を編制して広西へ向かった。永安州で清軍の戦いぶりに失望した彼は新寧県に戻ったが、太平軍が桂林を攻撃すると右江道嚴正基

(湖南淑浦県人)の要請に応じ、1,000名を集めて再び出陣した。また太平軍が北上すると、彼も救援軍の一員として全州に向かった。和春が城北の太平鋪に駐屯していた江忠源と連絡を取り、州城の包囲を解こうとしたことは先述の通りである<sup>90)</sup>。

P. H. Kuhn氏が指摘するように、江忠源の関心はまず故郷の安全であり、それを拡大させた湖南あるいはそれと関連する限りでの帝国の安泰にあった<sup>91)</sup>。全州において彼が危機感を抱いたのは、船を獲得した太平軍が湘江を下り、省都である長沙を急襲することであった。それは「該逆は大いに偽示を張り、長沙の省会を直撲したいと言っている……。衡州で捕らえられた密偵も、長沙を包囲攻撃する予定だと述べた」<sup>92)</sup>とあるように決して杞憂ではなかった。そして江忠源の採った措置は「川の水が比較的浅い」水塘湾に切り出した樹木や杭でバリケードを築き、太平軍の進撃を阻止することだった<sup>93)</sup>。

6月5日に太平軍は水陸両軍に分かれて全州を出発した。清軍はこれを追撃し、「朝から晩まで接戦すること数回、賊を殺すこと多数」と戦った。夕方に太平軍は河原に、清軍は山の斜面にそれぞれ撤退したが、夜になってもバリケードを破壊しようとする太平軍との間に小競り合いが続いた。そして6日の戦況について和春は次のように語っている

十九日(6月6日)に賊船二百余隻が蓑衣渡の河面に停泊し、陣地のように環を作った。兩岸から砲弾は雨のごとくで、死力をつくして抵抗した。各軍はやはり四隊に分かれて勇気をふるって攻撃し、大勝利を収めた。殺した賊匪は二百余名、水に溺れて死んだ者も数十名おり、賊船一隻を焼いた。上流の兩岸は兵勇が防備を固め、川岸には樹木や杭が行く手をさえぎり、加えて河口を塞いで下流に逃れる道を阻んだ。賊は勢いを失って追いつめられ、二十日(6月7日)未明に船を棄て、対岸から道を奪い、山を越えて逃走した。また報告によれば、官兵はしばしば勝利し、賊匪はみづから数十隻の船を焼き、輜重の大半を棄てて山道から逃げたという<sup>94)</sup>。

また周永興の供述も「十九日(6月6日)の夜中に官兵が突然川岸に至り、賊匪は抵抗できず、ついにそれぞれ逃げた。官兵は火を放って船を焼き、あらゆる賊匪の米穀、銀錢、火薬は共に焼かれた」<sup>95)</sup>と述べている。これをみる限り太平軍の人的損失はやはり数百名であり、『江忠烈公遺集』が述べるように「悍賊の死者は数千」だった訳ではなかった。だが水陸から湘江を下る戦略は破綻し、補給物資の多くを失ったことが窺われる。このとき西岸にいた江忠源は、急ぎ東岸に陣地を築いで太平軍の退路を断つように進言したが、受け入れられなかったという<sup>96)</sup>。

さて陸路東へ向かった太平軍は6月8日に湖南零陵県内の水西橋に到達し、9日に永州府城を攻撃した。だが湖南提督鮑起豹、永州鎮総兵孫应照は城外の浮橋を破壊し、船を撤去したために、太平軍は水かさの増した瀟江を渡ることができず、11日には零陵県の大排地方に退いた<sup>97)</sup>。この地は永州から道州へ至る街道に当たっており、さらに南下すれば広東方面

への進出も可能だった。6月15日に桂林にいた賽尚阿が徐広縉に宛てた手紙は次のように述べている。

仲升（徐広縉の字）二兄大人へ……。数日来、各軍の報告や偵察の結果によれば、逆匪は全州で撃たれて逃げ出し、まっすぐに永州へ向かった。ここは瀟江によって守りを固め、堅壁清野をしており、賊は掠奪ができず、攻めることも出来なかった。しかも賊首の蕭朝潰（馮雲山の誤り）は全州で殺され、現在その首は省城（桂林）に届けられた。馮雲山、羅亞旺（羅大綱）も聞くところでは重い傷を受けた。逆泉（洪秀全をさすと思われる）は捕まっておらず、首領もなお数人いるが、全州で大いに損害を与えたため、残りは船や輜重を棄てて逃れており、情形はまことに迫いつめられているようだ。永州に至ってほしいままにすることが出来ず、いまは道州から逃げているが、勢いはすでに衰えている。

ただ道州は湖南の寧遠、藍山、江華に道が通じており、広西の全州、灌陽にも抜けることができる。また江華は広西の富川、賀県、広東の連山と隣り合わせている。灌陽も恭城と境を接し、平楽、賀県へつながっている。賊の勢いは衰えたが、恐らくは遠く両広へ向かい、人々を煽動して隠れようとするだろう。現在永州に向かっている各軍はみな必死に追尾しており、賊がもし再び北に向かった場合は、わが軍と湖南の守備兵で迎え撃つことができる。ただし両広の省境各地は、必ずあらかじめ兵を配置する必要がある。私はすぐに広西の富川、賀県などに警戒態勢を取らせた。広東の毘連する連山などについては、二兄大人が防備を加えられることを望む。各地の兵がよく追撃すれば、賊の至るところへわが軍もすぐに到着できると思う<sup>98)</sup>。

ここで賽尚阿は蓑衣渡の戦いにおける勝利を報じ、太平軍の勢いは衰えていると鎮圧に樂觀的な見通しを述べている。また太平軍が湖南南部から広西、広東へ戻る可能性を指摘し、省境地帯の警備を固めるように要請した。さらに賽尚阿は「報告によると賊は永州から逃れる時、永州の上流で民船を数十隻奪い、水陸から進んでいるとのことだった。ただし永州から道州までは川の流れが逆なので、わが追撃の兵が追いつくことも可能と思われる」と述べている。11日に永州に到着した和春は軍を二手に分けて道州へ向かったが、途中で太平軍を捕捉できると考えられていたことがわかる<sup>99)</sup>。

これら清軍に有利な戦局を、一変させてしまったのが6月12日の太平軍による道州占領であった。前任湖南提督の余万清は州城で太平軍を迎え撃たず、程喬采と賽尚阿の激しい非難を浴びた。とくに彼が程喬采を怒らせたのは、11日の書簡で「逆匪が披猖し、下游は喫重であるため、まさに兵を率いて衡州へ向かい、兼ねて長沙の省会を護りたい」<sup>100)</sup>とあるように、長沙の防衛を口実に太平軍の攻撃を避けようとしたことだった。

道州知州王揆一の証言によると、6月12日朝に太平軍が州城から20キロの莊水塘に迫る

と、余万清は「兵を帯びて堵剿する」と言って城から出ようとした。王揆一は彼を引き留め、共に城内を巡回した。やがて太平軍が姿を見せ、北門の兵が砲撃を始めたが、余万清はすでに西門から兵を連れて城を出ていた。王揆一は余万清を連れ戻そうとしたが、太平軍が開いていた西門から城内へ進入したという。

いっぽう余万清の言い分は次のようであった。全州救援軍に加わっていた彼は、全州の陥落後に兵 200 名を連れて道州の防衛に向かった。彼が道州に到着して調べたところ、城壁の高さが足りず、城外の家屋を撤去する必要があったが、王揆一は余万清が「権限のない」休職中の官員であるために取り合わなかった。さらに道州には兵が 230 名しかおらず、籠城は無理と考えた余万清は、城外の川辺にある蛇皮湾で太平軍を迎撃しようとした。しかし太平軍の進撃が早く、先に渡河されたために戦闘のチャンスを逸したという。

その後余万清は衡州へ出頭し、自分の採った措置が適切でなかったことを認めたが、決して「怯えて逃れた」のではないと主張した<sup>101)</sup>。10 月に程裔采は賽尚阿と連名で、余万清が門を開いて城の陥落を招いたのは「実に情理の外」であるとして、彼を斬監候（事実上の無期懲役）とするように求めた<sup>102)</sup>。だがその実程裔采も太平軍が全州を陥落させると、省城防衛の重要性を力説して長沙へ撤退しようとした。また程裔采が道州へ派遣した増援軍は到着せず、団練も動員されなかったために、余万清は僅かな兵力で太平軍の進攻に対処せざるを得なかった<sup>103)</sup>。さらに余万清は太平軍の猛攻によって全滅した全州守備隊の姿を目の当たりにしていた。彼が太平軍の執拗な攻撃に恐怖を抱き、籠城する意志を失ったとしても不思議はないだろう。

ところで江忠源は襄衣渡での勝利後の清軍の戦いについて次のように振り返っている。

この時わが湖南が少しでも防備を固めていれば、前後から挟み撃ちにして、彼らを殲滅することも難しくなかった。だが彼らが永州に入ると、土匪の参加や会匪の入党が、一日に千人を数えるありさまだった。また地方の文武官員もみな噂を聞いて先に逃げてしまい、一たび道州に至ると、再び勢いが盛んとなった<sup>104)</sup>。

ここでは湖南側の準備不足によって太平軍殲滅のチャンスを逃し、全州守備隊全滅の恐怖が伝わって多くの地方官が逃亡したことを批判すると共に、湖南南部の「土匪」や「会匪」が太平軍に多数参加したと伝えている。李秀成も「湖南の道州、江華、永明で集めた民は二万人以上」<sup>105)</sup>であったと述べており、この地における軍勢の拡大は太平天国が全国的な運動に発展するうえで重要な転機となったと言われている。

それでは永安州から全州までの行程で、目立った人数の増加が見られなかった太平軍が、なぜ道州で勢力を伸ばすことができたのだろうか？ その第一の要因は太平軍が無血開城となった道州で「偽りの仁義を施し、郷民を籠絡して、あまり殺戮を行わなかった」<sup>106)</sup>とあるように、軍をよく統率して住民との信頼関係を構築した点にあった。



小島晋治氏がロンドンで発見した太平軍兵士の供述書のうち、道州で太平軍に加わった蔣光明（道州田骨洞村人）、鄭光今（道州鄭家村人）は「四月二十五日（6月12日）に広西の賊人が道州に至り、城を占領した。その賊人は私の村にやってきて、金持ちに向かって米や銀錢を要求したが、村人には今まで通りのなりわいをするように命じた」などと述べている。また蔣光明の兄である蔣福蕙が「賊首太平王洪秀全の夥内に投入」すると、米や塩、油を売りに行った蔣光明ら13名が次々と入隊した。鄭光今ら3名も布を売りに行ったところを太平軍に加わったという<sup>107)</sup>。

むろん太平軍は清朝官員や將兵、官位をもつ紳士、下層役人に対しては厳しい態度で臨み、7月に占領された江華県では知県劉興桓らが家族もろとも殺された<sup>108)</sup>。だが「その職人や商人、平民に対しては虐待せず、通過した地域では飯を一杯提供させるだけだった。土匪は衣服や食物、家畜を奪うが、長髪（太平軍）はすこぶる謹飭で、婦人のいる家があれば部屋の中に入ることを許さず、直接物の受け渡しもさせなかった。賊の命令が大変厳密だったため、民は恨もうとしなかった」<sup>109)</sup>とあるように、太平軍は少なくとも蜂起以来の老兄弟については一般住民に対する掠奪や暴行を厳しく禁止した。それは東王楊秀清の「民を安んじる命令がひとたび出ると……、命令なく民家に入った者は斬罪に処せられ、左足を民家の門にふみ入れた者はすぐに左足を斬られた」<sup>110)</sup>という有無を言わさぬ強制によるものだったが、約2ヶ月に及ぶ道州占領中も人々の支持を獲得し、軍に休息と再編制の時間を与えることに成功したのである。

第二に指摘すべきは社会の流動性の高さであった。小島氏が発見した供述書の中で、最も典型的なのは劉新發（広東連州星子山人）のケースである。彼は弟と広西荔浦県に住む兄を頼って移住し、農業と屠殺業を手がけた。1852年5月に彼は友人と共に桂林、全州へ布売りの商売に出かけ、6月に道州につくと水売りをやった。そして7月に広西永安州人の鄧姓に迫られて太平軍に入った<sup>111)</sup>。劉新發の足跡は本稿が検討した太平軍の活動範囲をほぼ網羅しており、永安州で捕らえられた洪大全（郴州人）の例と併せて、これらの地域が人とモノの移動を通じて密接な関係にあったことを示している。

別書で指摘したように、太平天国当時の道州では「木客鉞戸」すなわち森林伐採や鉞山労働に従事する下層移民が多く入植し、山内を開墾してヤオ族などの少数民族と競合したばかりか、人口急増による物価騰貴をきっかけに漢族の早期移民とも対立した<sup>112)</sup>。太平軍に参加したのはこうした滞留人口であり、巫法貴（福建人）は「湖南藍山県へ移り住み……、先に人に雇われて山を耕したが、のち貧しさに堪えきれず、外に出て乞食をした」と述べている。また江華県城で店を営んだ黄非隆や「雇われて暮らしていた」蔡学伴、永明県上江墟で「商売をしていた」高義勝、広東興寧県から移住してきた客家の謝五姉など、彼らが商業活動や移住によって社会的上昇のきっかけを模索していたことも、多くの参加者を生んだ原因であろうと考えられる<sup>113)</sup>。

最後に挙げられるのは「土匪」と「会匪」即ち様々な武装集団や天地会、青蓮教などの反

体制的組織の呼応と参加である。そのうち天地会系結社と太平軍の関係については、広東北部の動向を踏まえた分析が必要であり、本稿でその全体像を語ることは出来ない。ここでは道州付近の事例について事実関係を確認しておくことにしたい。

太平軍が道州を占領して間もない6月16日、羅大綱が1,000名余りの「土匪」あるいは「斎匪(青蓮教徒)」を率いて寧遠県城を攻撃した。彼らは「賊が永州から逃れて後、途中で従った土匪、斎匪は陸続と増えて三、五千人」「(道州)城を占領すると、斎匪数百人が長髪賊数十人を連れて、南門外から川を渡り寧遠へ向かった」とあるように、永州から道州一帯で太平軍に加わった者たちだった。清軍がこれを却けると、彼らは6月22日に再び寧遠県を攻めたが、副将鄧紹良の率いる援軍によって撃退されたという<sup>114)</sup>。

また太平軍が道州を占領した6月12日には、永州の西北に位置する東安県で蔣璠(已革生員)が蜂起した。彼の兄である蔣璠は捐納訓導だったが、1851年に訴訟事件で「屢々侮辱をうけ、人を集めて結拜弟兄を行い、幫助を得たい」と考えた。そこで蔣璠は唐衢、蔣衡(共に生員)らと数十名を集め、2度にわたり蔣璠を大哥として結拜儀礼を行った。その後事件が発覚して蔣璠は絞首刑となったが、蔣璠は復讐を思い立ち、「粵匪に冒充」すなわち太平天国の名を記した旗を作って石板橋、白牙市で蜂起した。彼らは東安県城を襲撃したものの、2度の戦闘で200名近くが殺され、蔣璠は逃亡したという<sup>115)</sup>。

さらに7月24日には太平軍が江華県城を陥落させた。この時協力したのは周法貴の率いる「土匪」1,000名と黃亜四(広東嘉應州人)の率いる天地会系反乱軍2,200名であった。彼らはまず数百名が「潮州勇を詐称」して城内に入ると、突然紅巾姿となって城外の「賊匪」と呼応して攻撃を始めた。すると城内にいた清軍、壮勇400名は防ぎきれず城は陥落した<sup>116)</sup>。また翌25日には永明県でも「民心が混乱し、兼ねて土匪が隙に乗じて蜂起」したために、太平軍1,000名余りの攻撃によって県城が占領されたという<sup>117)</sup>。

檔案史料によって確認できる呼応勢力の数は、「一日に千人」あるいは「二万人以上」といった数字とはかなりの開きがある。江忠源や李秀成の証言は過大な印象を免れず、道州一帯の参加者は多く見積もっても数千人だったと見るべきだろう。ただし賽尚阿が「賊が湖南に入ってから、各地の土匪で従ったり、遙かに呼応する者は広西に比べて多い」<sup>118)</sup>と指摘したように、1万人前後で推移していた広西北部の状況から見れば事態は変わりつつあった。その後太平軍が兵力を整え、揚子江流域に進出可能な勢力に成長するには、太平天国自身の積極的な働きかけを含めた多くの要因が必要だったのである。

## 小 結

本稿は太平天国が永安州を脱出後、湖南省に進出して道州に駐屯するまでの時期を検討した。当初清朝は太平軍が東進すると予想しており、彼らが北へ進路を変え、省都桂林を急襲したのは晴天の霹靂だった。向荣は急ぎ桂林に戻り、住民の動揺を鎮めて鄒鳴鶴と防衛戦に取りかかったが、烏蘭泰の死によって指揮官の不足に悩み、総帥である賽尚阿が陽朔県で模

様眺めをするなど士気の低さに苦しんだ。いっぽう太平軍も桂林城を完全に包囲するだけの兵力は持ち合わせていなかった。

また桂林では紳士の龍啓瑞らが団練を組織していた。彼らの団練構想は単なる治安維持の軍事力としてではなく、団練局を中心に産業を育成して経済を活性化し、失業問題を解決しようとする長期的な地域振興策であった。しかし戦闘経験がなかったために急場の役には立たず、その敗北によって鄒鳴鶴共々咸豊帝から叱責を受けた。さらに桂林における太平天国に対する反応の中で、注目すべきはイスラム教徒の参加と協力であった。彼らが太平軍に共感を寄せた理由は同じ一神教だった上帝教の中国既存の宗教に対する厳しい批判にあり、太平天国の強い宗教性が改めて浮かび上がるようになった。

さて桂林攻撃をあきらめた太平軍は、広西北部の全州を攻撃して占領した。この太平軍の全州攻撃については、南王馮雲山が負傷した報復として住民を虐殺したという伝説があった。本稿は新たに発見した太平軍兵士の供述書を手がかりに、①馮雲山が負傷、戦死したのは全州占領後に行われた蓑衣渡の戦いであること、②全州で太平軍に殺された 1,300 名は清軍守備隊や団練兵士であり、彼らを宗教的な仇敵とみなす太平軍の執拗な攻撃にさらされて全滅したこと、③両軍の非妥協的な戦いぶりは、虚偽と保身に満ちていた当時の中国社会において理解を絶するものだったために、人々は「王が殺された報復に住民を虐殺した」という物語を生み出したことを指摘した。

その後発生した蓑衣渡の戦いは、短期的に見れば太平軍の敗北であった。その損失は江忠源が強調するほど大きなものではなかったが、船や軍需物資を失ったために衡州方面への進出は不可能となった。だが永州から南下して道州を占領し、数千人の参加者を得たことは太平天国の新たな発展を基礎づけた。それを可能としたのは一般住民の信頼を勝ち取った太平軍の統率力や湖南南部における社会の流動性、「土匪」や「会匪」の協力であったが、そもそも全州攻防戦で太平軍が見せた「不寛容」な戦いぶりに、清朝の地方官や将兵が恐怖を抱いたことも否定できない。

このように考えると、広西北部から湖南南部を転戦した当時の太平天国は、なお強い宗教性を帯びていたと言えるだろう。この特質は当時の殆どの中国人にとって理解に苦しむものであり、儒教知識人の異端的宗教に対する恐怖と敵意を煽ることになった。またこの頃ようやく中国辺境の反乱に注目したヨーロッパ人宣教師にとっても、こうした虐殺事件——彼らが情報を入手出来たのは桂林の戦況と道州における「政府軍」の暴行<sup>119)</sup>であったが——は西洋近代文明の対極に位置する「野蛮」「愚行」と映ったことだろう。しかし太平軍の宗教的情熱に支えられた真剣さこそは、19 世紀のキリスト教が海外布教で伝えようとした「真理」であった。言いかえれば敵に対する虐殺を厭わない太平天国の不寛容こそは、ヨーロッパが中国に伝えた近代社会の負の側面だったのである。

その後湖南南部でさらに勢力を拡大し、長沙攻撃に向かった太平天国については、別の機会に論じることにした。

## 註

- 1) 菊池秀明『広西移民社会と太平天国』【本文編】【史料編】風響社、1998年。
- 2) 菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』汲古書院、2008年。
- 3) 菊池秀明「広西における上帝会の発展と金田団営」(『アジア文化研究』35号、2009年)。同「金田団営後期の太平天国をめぐる諸問題」(未発表)。
- 4) 菊池秀明「永安州時代の太平天国をめぐる一考察」『アジア文化研究』36号、2010年。同「広東凌十八蜂起とその影響について」(未発表)。
- 5) 簡又文『太平軍広西首義史』商務印書館、1944年。同『太平天国全史』香港猛進書屋、1962年。
- 6) 鍾文典『太平天国開国史』広西人民出版社、1992年。
- 7) 茅家琦主編『太平天国通史』南京大学出版社、1991年。
- 8) 崔之清主編『太平天国戦争全史』1、太平軍興(1850-1853)、南京大学出版社、2002年。
- 9) 小島晋治「初期太平天国兵士十名の供述書」『東京大学人文科学紀要』75、1982年(同『太平天国運動と現代中国』研文出版、1993年、85頁)。
- 10) 徐広緒致葉名琛の信、咸豊二年三月初二日、F.O. 931 1301号、National Archives蔵。
- 11) 賽尚阿奏、咸豊二年二月二十七日、中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』3、中国社会科学出版社、1990年、51頁(以下『鎮圧』と略称)。鄒鳴鶴奏、咸豊二年二月二十六日『鎮圧』3、50頁。
- 12) 洪大全供詞、咸豊二年二月二十七日『鎮圧』3、58頁。
- 13) 軍機大臣、咸豊二年三月初十日『鎮圧』3、79頁。
- 14) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、中国社会科学出版社、1995年、122頁。
- 15) 賽尚阿奏、咸豊二年二月二十七日『鎮圧』3、51頁。
- 16) 賽尚阿奏、咸豊二年二月二十七日『鎮圧』3、62頁。
- 17) 丁守存『從軍日記』出劫記(太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』2、中華書局、1962年、313頁)。
- 18) 鄒鳴鶴奏、咸豊二年二月二十九日『鎮圧』3、66頁。
- 19) 賽尚阿奏、咸豊二年三月初六日、軍機処檔 083656号、国立故宮博物院蔵。
- 20) 嘉慶『広西通志』巻126、建置略一、城池一、桂林府。また鄒鳴鶴奏、咸豊二年三月二十一日『鎮圧』3、113頁。
- 21) 光緒『臨桂県志』巻18、前事志、清。光緒『永安州志』巻4、兵志、己酉以来十九年兵事記略、共に広西区図書館蔵。
- 22) 鄒鳴鶴奏、咸豊二年三月初七日『鎮圧』3、72頁。また佚名「粵西桂林守城記」(『時間叢録』『太平天国史料叢編簡輯』5、70頁)。
- 23) 賽尚阿奏、咸豊二年三月初六日、軍機処檔 083656号。
- 24) 烏蘭泰奏、咸豊二年三月二十日、軍機処檔 083980号。
- 25) 賽尚阿奏、咸豊二年三月二十四日『鎮圧』3、129頁。
- 26) 鄒鳴鶴奏、咸豊二年三月初七日・十三日『鎮圧』3、72・90・94頁。
- 27) 鄒鳴鶴奏、咸豊二年三月十三日『鎮圧』3、90頁。
- 28) 賽尚阿奏、咸豊二年四月初四日『鎮圧』3、151頁。
- 29) 徐広緒奏、咸豊二年五月初九日、軍機処檔 084788号。その草稿は National Archives に保存されている(F.O. 931 1337)。

- 30) 鄒鳴鶴奏、咸豐二年三月二十一日『鎮圧』3、113 頁。
- 31) 鄒鳴鶴奏、咸豐二年三月二十一日『鎮圧』3、113 頁および同奏、咸豐二年三月二十九日、軍機處檔 084030 号。
- 32) 鄒鳴鶴奏、咸豐二年三月二十一日『鎮圧』3、110 頁。
- 33) 程番采奏、咸豐二年三月初八日『鎮圧』3、76 頁。賽尚阿奏、咸豐二年三月二十四日『鎮圧』3、124 頁には「聞楚兵二千由提督余万清管帶前來、尚在永州、俟兵到齊前進」とあり、鄒鳴鶴奏、咸豐二年三月二十九日、軍機處檔 084030 号に「其咨調之湖南兵、現經提督余万清先行帶到一千名」とあるように、戦線に駆けつけたのは半分の兵力だった。
- 34) 賽尚阿奏、咸豐二年三月十三日・四月初一日『鎮圧』3、96・141 頁。それによれば張国樑は 5 月 12 日によく平南県へ到達し、陸路桂林へ向かったという。
- 35) 賽尚阿奏、咸豐二年三月二十四日『鎮圧』3、124 頁。
- 36) 鄒鳴鶴奏、咸豐二年三月二十日、軍機處檔 083889 号。
- 37) 『清史稿』卷 378、列伝 165。また鍾文典主編『桂林通史』广西師範大学出版社、2008 年、153 頁。なお朱琦は投降した張嘉祥の才能を見抜き、その家族の命を保証して「国樑」の名前を与えた。後に彼は浙江巡撫王有齡に重んじられ、1861 年に忠王李秀成軍の杭州攻撃で死亡した。
- 38) 『清史稿』卷 482、列伝 269、儒林 3。また呂斌編著『龍啓瑞詩文集校籤』岳麓書社、2008 年所収の前言および経徳堂文集導言。
- 39) 鄒鳴鶴奏、咸豐元年四月二十四日『鎮圧』1、430 頁。また同奏、咸豐元年閏八月十九日、同書 2、321 頁にも「一面商之総局之紳士龍啓瑞、朱琦、即飭団練、各就地段、分撥加防」とある。
- 40) 龍啓瑞「粵西団練輯略序」『経徳堂文集』卷 2（『龍啓瑞詩文集校籤』377 頁）。
- 41) 龍啓瑞「大岡埠団練公局記」『経徳堂文集』卷 3（『龍啓瑞詩文集校籤』409 頁）。
- 42) 龍啓瑞「勸諭通省団練文」『経徳堂文集』別集下（『龍啓瑞詩文集校籤』553 頁）。
- 43) 龍啓瑞「致各府紳士書」『経徳堂文集』別集下（『龍啓瑞詩文集校籤』553 頁）。
- 44) 菊池秀明「広西における移民社会の変容」『清代中国南部の社会変容と太平天国』37 頁。
- 45) 鄒鳴鶴奏、咸豐元年九月二十九日『鎮圧』2、443 頁。
- 46) 龍啓瑞「上梅伯言先生書一」『経徳堂文集』卷 3（『龍啓瑞詩文集校籤』423 頁）。
- 47) 鄒鳴鶴奏、咸豐二年三月二十九日、軍機處檔 084030 号。
- 48) 隨同守城為出力団練紳士清單、咸豐二年四月十五日、軍機處檔 084333 号。
- 49) 粵西独秀峰無名氏題壁三十首（太平天国革命時期広西農民起義資料編輯組編『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、中華書局、1978 年、255 頁）。
- 50) 広西省城選丁清查保甲章程、咸豐三年、F.O. 931 1380 号（佐佐木正哉編『清末の秘密結社』資料編、近代中国研究委員会、1967 年、228 頁）。
- 51) 粵西独秀峰無名氏題壁三十首。
- 52) 擬桂林府属廂郷団練做府兵番上之法、咸豐三年、F.O. 931 1312 号。
- 53) 況澄「時事詩二十四首」『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、260 頁。
- 54) 鍾文典主編『桂林通史』140 頁。鍾文典『太平天国開国史』306 頁。
- 55) 鄒鳴鶴奏、咸豐二年三月三十日『鎮圧』3、137 頁。
- 56) 鍾文典『太平天国開国史』310 頁。
- 57) 三妹ヤオ族については光緒『永安州志』卷 14、夷民部。また鍾文典『太平軍在永安』三聯書店、1962 年、151 頁。
- 58) 菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』171 頁。



- 59) 神戸輝夫「スレイドン隊による緬滇ルート調査——マーガリー事件前史」『大分大学教養学部研究紀要、人文・社会科学』6(5)、1983年。杜文秀はスレイドン隊に対する手紙で彼らを「信仰を同じくする者」と呼んだ。またフランス隊に対しては「ムスリムとキリスト教徒は兄弟である」と語ったという (Francis Garnier, *Further Travels in Laos and in Yunnan*, (Bangkok: White Lotus Press, 1996), 218)。
- 60) 鄒鳴鶴奏、咸豊二年三月二十一日『鎮圧』3、110頁。況澄「時事詩二十四首」。
- 61) 鄒鳴鶴奏、咸豊二年四月初三日、軍機處檔 084179 号。賽尚阿奏、咸豊二年四月初四日『鎮圧』3、148頁および 151頁。
- 62) 賽尚阿奏、咸豊二年四月十二日『鎮圧』3、168頁。鄒鳴鶴奏、咸豊二年四月十三日『鎮圧』3、183頁。
- 63) 賽尚阿奏、咸豊二年四月十二日『鎮圧』3、177頁。
- 64) 軍機大臣、咸豊二年四月初六日『鎮圧』3、155頁。なお鄒鳴鶴は潮勇に連日酒を与え、戦うように勧めるなどの浪費を行った。不正な経理も現実であり、「賞官各自積私財」「最惜帑金千万両、簿書虛冒一篇開」と言われた (粵西独秀峰無名氏題壁三十首『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、255頁)。
- 65) 諭内閣、咸豊二年四月初六日『鎮圧』3、152頁。軍機大臣、咸豊二年四月初六日『鎮圧』3、154頁。
- 66) 鄒鳴鶴奏、咸豊二年四月初三日、軍機處檔 084179 号。同奏、咸豊二年四月十一日『鎮圧』3、167頁。
- 67) 鄒鳴鶴奏、咸豊二年四月十三日『鎮圧』3、183頁。
- 68) 賽尚阿奏、咸豊二年四月二十三日『鎮圧』3、230頁。
- 69) 諭内閣、咸豊二年四月二十六日『鎮圧』3、247頁。
- 70) 楊秀清、蕭朝貴「為奉天討胡、檄布四方」『頒行詔書』(中国近代史資料叢刊『太平天国』1、神州国光社、1952年、161頁)。なおこの檄文は永安州時代に下層知識人の曾釗揚、黃再興 (共に桂平県人) が作成したと考えられる (張德堅『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下、『太平天国』3、53-60頁)。
- 71) 簡又文『太平軍広西首義史』295頁。なお簡又文氏は1943年に全州を訪問して、父老から「大殺三日、始行封刀」であったと聞き、県城西郊に残る犠牲者の墳墓「千人塚」を視察した。
- 72) 崔之清主編『太平天国戦争全史』1、461頁。
- 73) 周永興供詞、咸豊二年五月初四日、軍機處檔 084613 号。
- 74) 常大淳奏、咸豊二年七月二十九日、軍機處檔 085866 号。
- 75) 『天兄聖旨』巻2、壬子年三月十五日 (中国近代史資料叢刊続編『太平天国』2、広西師範大学出版社、2004年、321頁)。
- 76) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、122頁。
- 77) 賽尚阿奏、咸豊二年五月初四日『鎮圧』3、272頁。
- 78) 周永興供詞。
- 79) 鄒鳴鶴奏、咸豊二年四月十三日『鎮圧』3、186頁。民国『全県志』巻9、前事。
- 80) 賽尚阿奏、咸豊二年四月十二日『鎮圧』3、168頁。
- 81) 民国『全県志』巻9、前事。
- 82) 賽尚阿奏、咸豊二年四月二十三日『鎮圧』3、219頁。
- 83) 簡又文『太平軍広西首義史』297頁。また民国『全県志』巻13。

- 84) 賽尚阿奏、咸豐二年四月二十三日『鎮壓』3、219 頁。
- 85) 戴鈞衡「草茅一得」(中国社会科学院近代史研究所編『太平天国文献史料集』中国社会科学出版社、1982 年、370 頁)。
- 86) 賽尚阿奏、咸豐二年四月二十三日『鎮壓』3、219 頁。
- 87) 楊秀清、蕭朝貴「為奉天討胡、檄布四方」。
- 88) 鄒鳴鶴奏、咸豐二年五月初五日『鎮壓』3、280 頁。
- 89) 簡又文『太平軍廣西首義史』297 頁。
- 90) 『江忠烈公遺集』卷首、国史本伝および附録「江忠烈公行状」。賈熟村『太平天国時期的地主階級』広西人民出版社、1991 年、242 頁。
- 91) P. H. Kuhn, *Rebellion and its Enemies in Late Imperial China: Militarization and Social Structure 1796-1864*, (Harvard University Press, 1970), 117.
- 92) 程番采奏、咸豐二年四月二十三日『鎮壓』3、215 頁。
- 93) 賽尚阿奏、咸豐二年四月二十三日『鎮壓』3、219 頁。
- 94) 鄒鳴鶴奏、咸豐二年四月二十四日『鎮壓』3、232 頁。
- 95) 周永興供詞。
- 96) 『江忠烈公遺集』附録「江忠烈公行状」。
- 97) 程番采奏、咸豐二年四月三十日『鎮壓』3、251 頁。
- 98) 賽尚阿致徐広縉の信、咸豐二年四月二十八日、F.O. 931 1339 号。
- 99) 賽尚阿致徐広縉の信。なお賽尚阿奏、咸豐二年五月初四日『鎮壓』3、268 頁によると、和春は永州に 2,000 名を残し、1 万 3,000 名を率いて道州へ向かったという。
- 100) 程番采奏、咸豐二年四月三十日『鎮壓』3、251 頁。
- 101) 程番采奏、咸豐二年五月十三日『鎮壓』3、301 頁。また賽尚阿奏、咸豐二年五月十三日『鎮壓』3、313 頁では道州失陥の責任と併せて、全州でも「距城十餘里外地方紮營、旬日之間、未能設法剿援、以致全州被陷」であったと非難されている。
- 102) 賽尚阿等奏、咸豐二年九月初四日『鎮壓』3、590 頁。
- 103) 程番采奏、咸豐二年四月二十三日『鎮壓』3、218 頁。また賽尚阿等奏、咸豐二年九月初四日『鎮壓』3、590 頁には「時該州防兵二百六十余名、臣程番采統行撥往之二百名尚未趕到」とある。なお光緒『道州志』および檔案史料には、太平軍の道州攻撃時に団練が動員されたとの記載は見えない。同書卷 12、雜撰、新采忠孝節義の劉光明の条に「咸豐二年、粵賊竄踞州城数月、光明倡首団練、防守要隘、保全西北一帶地方」とあり、道州の団練が本格的に組織されたのは道州陥落後と思われる。
- 104) 『江忠烈公遺集』卷 1、答劉霞仙書。
- 105) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、122 頁。
- 106) 光緒『道州志』卷 12、雜撰、新采忠孝節義。
- 107) 小島晋治「初期太平天国兵士十名の供述書」。黄非隆等供詞、咸豐二年七月十九日、F.O. 931 1375 号。また葉名琛奏、咸豐二年七月十九日『鎮壓』3、460 頁を参照のこと。
- 108) 同治『江華県志』卷 7、兵防、寇変および卷 4、職官、治迹。
- 109) 佚名「粵匪犯湖南紀略」『太平天国史料叢編簡輯』1、67 頁。
- 110) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、138 頁。
- 111) 劉新發供詞、咸豐二年七月十九日、F.O. 931 1375 号。
- 112) 光緒『道州志』卷 3、賦役。

- 113) 巫法貴等供詞、咸豐二年七月十九日、F.O. 931 1375 号。
- 114) 程喬采奏、咸豐二年五月十三日『鎮圧』3、304 頁。賽尚阿奏、咸豐二年五月十三日『鎮圧』3、307 頁。
- 115) 程喬采奏、咸豐二年正月二十六日『宮中檔咸豐朝奏摺』4、354 頁、国立故宫博物院藏。また程喬采奏、咸豐二年五月十三日『鎮圧』3、304 頁。
- 116) 賽尚阿等奏、咸豐二年六月二十四日『鎮圧』3、418 頁。鄧垂隆等供詞、咸豐二年七月十九日、F.O. 931 1375 号。
- 117) 賽尚阿等奏、咸豐二年六月二十四日『鎮圧』3、422 頁。光緒『永明県志』卷 32、武備志、兵事。
- 118) 賽尚阿等奏、咸豐二年六月二十四日『鎮圧』3、418 頁。
- 119) Overland Friend of China, 24 May 1852 (Prescott Clarke and J. S. Gregory, *Western Reports on Taiping*, (Honolulu: The University Press of Hawaii, 1992), 17) および Joseph-Marie Callery et Melchior-Honoré Yvan, *L'insurrection en Chine, Depuis son Origine Jusqu'à la prise de Nankin*, (Paris, 1853) (徐健竹訳『太平天国初期紀事』上海古籍出版社、1982 年、93 頁)。